

<- san?>の意味論:1つの形式と複数の意味の対応について

その他（別言語等） のタイトル	SEMANTICS OF <- san4> : ON THE CORRESPONDENCE BETWEEN ONE FORM AND MULTIPLE MEANINGS
著者	橋本 邦彦
雑誌名	室蘭工業大学研究報告．文科編
巻	43
ページ	49-94
発行年	1993-11-25
URL	http://hdl.handle.net/10258/587

<- san?>の意味論:1つの形式と複数の意味の対応について

その他（別言語等） のタイトル	SEMANTICS OF <- san4> : ON THE CORRESPONDENCE BETWEEN ONE FORM AND MULTIPLE MEANINGS
著者	橋本 邦彦
雑誌名	室蘭工業大学研究報告．文科編
巻	43
ページ	49-94
発行年	1993-11-25
URL	http://hdl.handle.net/10258/587

〈-san⁴〉の意味論：1つの形式と 複数の意味の対応について

橋 本 邦 彦

SEMANTICS OF 〈-san⁴〉 : ON THE CORRESPONDENCE BETWEEN ONE FORM AND MULTIPLE MEANINGS

Kunihiko Hashimoto

Abstract

The Mongolian suffix 〈-san⁴〉 is said to indicate perfectivity of an event but, actually, expresses various meanings depending on contexts. This paper begins by classifying the meanings as closely as possible. Through the classification we can find out the core meaning of the suffix which is shared by its multiple meanings. 〈-san⁴〉 gathers them around the core as a motivating element and constructs a semantic network. Our conclusion is that the form of 〈-san⁴〉 corresponds to the network. As many cognitive linguists, such as Lakoff and Johnson (1980), Lakoff (1987) and Langacker (1987, 1991), have claimed, one form corresponds to one semantic network, but not one meaning. The network consists of a central meaning or a prototype, less central meanings or nonprototypes and a motivating element of their connection. The semantics of 〈-san⁴〉 proves the adequacy of the correspondence concretely and positively.

1. 序 論

形式と意味とが1対1で対応していたとしたら、言語はずっと明晰であったに違いない。曖昧性も多義性もなく、誤解の余地のない伝達が可能であっただ

ろう。けれども、残念ながら、形式と意味との間には、1対1の対応関係は、専門的な術語のような特殊な場合を除いて、成立しないことが多い。

言語を観察してみると、1つの形式が複数の意味をもつ事例に行き当たる。

(1) a. I *took* her arm and led her to a chair.

(= get hold of something with one or both hands)

b. Will you *take* me to your father ?

(= move or guide someone / something from one place to another)

c. Our army has *taken* 1000 prisoners.

(= get someone by force)

d. This machine *takes* 10p coins.

(= use)

e. If you'll *take* my advice, you'll apologize.

(= accept)

5つの文は、英語の動詞〈take〉の他動詞的用法であり、等しく目的語名詞句をとっているが、意味は異なっている。(1 a)は「(手を用いて何かを)つかむ」ことを、(1 b)は「(誰かをある場所から別の場所へ)連れて行く」ことを、(1 c)は「(力づくで誰かを)捕らえる」ことを、(1 d)は「(何かを)用いる」ことを、(1 e)は「(忠告などを)受け入れる」ことを意味する。

反対に、複数の形式が1つの意味を共有する例も存在する。

(2) a. He *died* (of cancer / for his country).

b. He *passed away* (peacefully).

c. He *kicked the bucket* (in a ridiculous way).

d. He *was killed* (in a traffic accident).

(2 a)の〈die〉はもっとも一般的に用いられる形、(2 b)の〈pass away〉は婉曲的な表現、(2 c)の〈kick the bucket〉は滑稽さを含意する俗語っぽいイディオム、(2 d)の〈be killed〉は交通事故や戦争など外的な要因の影響を暗示するが、使用域やニュアンスの違いを超えて、「死ぬ」という意味を中核の部分で共有し合ってる。

一つの形式と複数の意味、あるいは複数の形式と1つの意味のような1対多の対応は、英語だけに特有のものではなく、世界中の言語に広く見られる事実であるように思われる。

モンゴル語（ハルハ方言）には、動詞語幹に付いてアスペクト的な意味を表示する接尾辞〈- san⁴〉があるが¹⁾、この接尾辞は、1つの形式と複数の意味の対応関係の典型例に数えることができる。

Poppe（1951）は〈- san⁴〉の意味を「完成／実現した行為（vollzogene Handlung）」、「完結／終了した行為（abgeschlossene Handlung）」であると述べている。これにほぼ準じた説明は、Sanzheyev（1973）、Luvsanjav et al（1976）、Vietze（1978）、小沢（1986）等でも施されており、完了のアスペクト接尾辞であると定義することができる。

〈- san⁴〉は、形態上は、動詞を名詞化し、Binnick（1979）では「動名詞」接尾辞、Luvsanjav et al（1976）では「時制名詞」接尾辞と呼ばれている。動詞語幹がこの接尾辞をとると、純粋な名詞とまったく同じ活用をする。

(3)

	a. sar（月）	b. av - (とる) + - san
主 格	sar	avsan
属 格	sariyn	avsnii
与 位 格	sard	avsand
対 格	sariyg	avsniiyg
奪 格	saraas	avснаas
具 格	saraar	avснаar
共 同 格	sartay	avсantay

(3 a) は普通名詞、(3 b) は動詞語幹に〈- san⁴〉の付いた動名詞形であるが、同じ仕方で格接尾辞をとっている。

名詞と動名詞形との並行性は、形態上の特徴にとどまらない。文における出

現の位置も並行している。Binnick (1979) も指摘しているように、〈- san⁴〉に導かれる動名詞句は、名詞句の現れ得る場所ならどこにでも現れることができる。もっと具体的に言うと、主語、目的語、後置詞の目的語、述語、修飾語、副詞句、同格句、否定辞〈- gūy〉の前、疑問小辞〈- uu / - ūū〉の前などである。

出現の位置の多様性は、実は、機能の多様性を生じさせ、機能の多様性は、結局、意味の多様性を生じさせるに至るのである。確かに、〈- san⁴〉は完了的なアスペクトを表すが、実際の使用の現場では、これだけでは説明しきれない用例が豊富に存在しているのであって、それこそ一筋縄では処理しきれないと言ってよい。

以下の考察では、まず〈- san⁴〉の様々な意味を担う具体的な言語資料を分類整理することから始める。次いで、それらの意味・概念構造を解明する。この構造を通して、一見多様性に富んだ〈- san⁴〉の意味も、核心の部分では、たった一つの意味に還元できることが明らかになる。この核心の意味に動機づけられて、〈- san⁴〉の様々な意味がプロトタイプの意味を中心にして関連づけられ、意味のネットワークといったものを構成していると考えるのである。

そこで、本稿の目的は、次のようになる。

- 1) 分類整理した言語資料から、核心となる意味の正体をつきとめる。
- 2) この核心の意味を、言語的環境の中で出現する複数の意味が、どのように共有し合いながら関連づけられているのか、有契化 (motivation) の仕方の実体を明らかにする。
- 3) 1) と 2) から、1つの形式は1つの意味のネットワークに対応することを証明する。

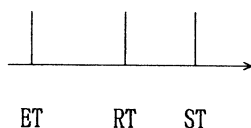
2. 時間的先行性

時間が、その性質上、二次元的な広がりを見せるのであれば、時間の軸というようなものを設定するのが都合がよい。Reichenbach (1947) は、常に右端

に向かって拡張していく軸上に、後に多くの研究者によって度々引用されることになる3つの時点を配置することで、すべてのテンス、アスペクトを図示して見せた。

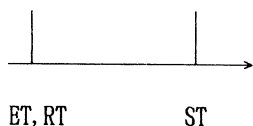
(4) Reichenbachのテンス/ アスペクトの図

a. 過去完了(Past Perfect):



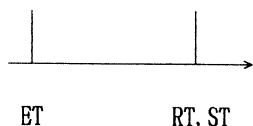
e. g. I had seen John.

b. 過去時(Past):



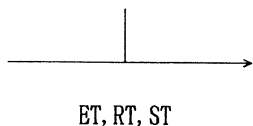
e. g. I saw John.

c. 現在完了(Present Perfect):



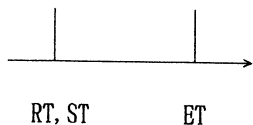
e. g. I have seen John.

d. 現在時(Present):



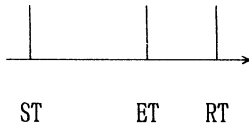
e. g. I see John.

e. 未来時(Future):



e. g. I shall see John.

f. 未来完了(Future Perfect):



e. g. I shall have seen John.

- ☆ ET (Event Time) : 事態の時間
- RT (Reference Time) : 指示の時間
- ST (Speech Time) : 発話の時間

上記 3 つの時間は、互いに独立したステイタスを有し、時間軸上で相対的な位置を占める。「私がジョンに会う」事態が、3 つの時点の先行性や同時性の組合せで、6 つの異なる形式に言語化されるのである。

Reichenbach の言語化された時間表示の図式は、色々なところで採り上げられ検討されてきたが（例えば、Comrie (1985)、Dahl (1985)、Binnick (1991) 等参照）、細部に関しては議論の余地はあるにせよ、概ねよくできた装置であるように思われる。本節では、必要な場合には手を加えつつ、この装置を利用して頂くことにする。

2. 1. 完了表示

第 1 節で、〈-san⁴〉はアスペクト的な意味を表す接尾辞であると紹介した。アスペクトとは、事態がどのように見られるのかを、時間の側面から表す形式である。「どのように見られるか」が問題になると、当然、話者の視点が関与する。Comrie (1976)、Binnick (1991)、Smith (1991) などによれば、次の 2 つの視点とそれに関連したアスペクトの存在が認められている。

- (5) a. 始発点 (an initial point) と終端点 (a final point) を含む事態全体に焦点を当てる場合、完了的アスペクト (perfective aspect) をもつという。⇨閉じた視点 (a closed viewpoint)

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

- b. 始発点も終端点も含まず、事態の内部の一部分にだけ焦点を当てる場合、未完了的アスペクト (imperfective aspect) をもつという。

⇒開いた視点 (an open viewpoint)

英語の文から典型的な例文を記す。

(6) a. I have walked (before).

b. I am walking (now).

(6 a) は現在完了形の文で、「歩く」行為はすでに完了していることを示す閉じた視点をもっている。(6 b) は現在進行形の文で、「歩く」行為を内部から捉えている未完了的な開いた視点をもっている。

完了的なアスペクトにのみ着目すると、(7) のような特徴をあげることができる。

(7) a. 事態の時間は指示／発話の時間に先行する。

b. 事態の時間から指示／発話の時間までまたがる時間の広がりを示す。

c. 事態の結果として生じる静態的な視点をもつ。

(7 a) の時間の先行性だけでは、(4 a, b, c) に見るように、完了的アスペクトと過去時とを区別することはできない。(7 b) により、過去時のようなテンスが時間を時間軸上に点として位置づけるのに対して、アスペクトは時間を面として捉えることがわかる。(7 c) により、事態の時間が、特に、指示の時間との間で関連性を示すことが明記されている。

〈- san⁴〉が完了的アスペクトの言語形式であるとする、(7) の特徴を余す所なく内在化させているはずである。そこで、〈- san⁴〉がプロトタイプの完了性を意味する例を観察していくことにする。

最初に、過去のある時点を指示の時間として、それより以前に事態が完了してしまっていることを示す用法を採り上げる。

(8) a. Dorjiy untaxad 12 tsagaas 5 minut öngörch bayjee.

ドルジ-[対] 寝る-[時] 時-[奪] 分 過ぎる-[連] いる-[過]

(ドルジが寝た時、12時を5分過ぎていました。)

b. Dorjiyг untaxад 12 tsagaas 5 минут өнгөрсөн байжее.

過ぎる-〔完〕

(ドルジが寝た時には、12時を5分過ぎてしていました。)

(9) a. Namayg xarixad düü xooloo idej baylaa.

私-〔対〕 帰る-〔時〕 弟 食事-〔再〕 食べる-〔連〕 いる-〔過〕

(私が帰宅した時、弟は食事をしていました。)

b. Namayg xarixad düü xooloo idsen baylaa.

食べる-[完]

(私が帰宅した時には、弟は食事をしてしまっていました。)

(8)、(9)の各文は、時点の副動詞形〈- xad⁴〉に導かれている。²⁾ (8 a)、(9 a)では、副詞節の行為をする時点が主節の描く継続的な事態の内に位置づけられる未完了的なアスペクトを示している。一方、(8 b)、(9 b)の主節述語に〈- san⁴〉のある文では、副詞節の行為の起こる時点より以前に主節の事態が済んでしまっていることを示している。

(8)、(9) を図示すると、次のようになる。

(10) a.

	untax(8a)	
	xarix(9a)	

RT ST

b.

öngöröx	xarix(8b)
i dex	untax(9b)

ET RT ST

c.

ET
öngöröx(8a)
i dex(9a)

主節の述語〈bay-〉に現在形の〈- na⁴〉が付くと、過去時において完了した事態の結果の現在時までの存続を表すことができる。

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

(11) a. Tanay suux sandal deer xüüxdüüd nom

あなた-[属] すわる-[非過] いす に 子供-[グ] 本

tavisan bayna.

置く-[完] いる-[現]

(あなたのすわる椅子に、子供たちが本を置いてしまっています。)

b. “Ulaanbaatar xotod olon üyldver surguuli

ウランバートル 市-[与位] たくさんの 工場 学校

baydag” gej ene nomd bichsen bayna.

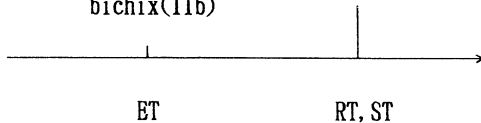
ある-[習] [引] この 本-[与位] 書く-[完] いる-[現]

(「ウランバートル市には、たくさんの工場や学校がある」とこの本に書いてあります。)

(11a) の「本を置く」行為は、過去のある時点でなされてしまっており、その結果、指示／発話の時点でその本が椅子の上にあるのである。(11b) のウランバートル市についての記述も、過去時に完了した行為であり、その結果として指示／発話の時点である現在時に当該の記述を読めるわけである。

(12) tavix(11a)

bichix(11b)



〈- san⁴〉が過去時の経験を表す例も存在する。

(13) a. Bi taniyg duuj baysan.

私-[主] あなた-[対] 聞く-[連] いる-[完]

(私はあなたのことをお聞きしています。)

b. Taniy aldar sayxan neriy tani nom xevlelees

あなた-[属] 評判 りっぱな 名前-[対] [2所] 印刷物-[奪]

olon üzsen.

何度も 見る-[完]

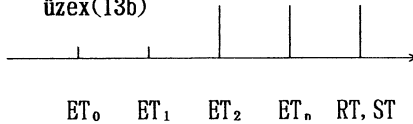
(あなたのお名前は (lit. あなたの評判とりっぱなお名前は) 本で何度も
拝見しました。)

(13a, b) は、「聞く」こと「見る」ことを過去時において経験しており、
その経験が現在時に至っても存続していることを意味している。継続を示す

(13a) の連結の副動詞形 〈-j〉、頻度を示す (13b) の副詞 〈olon〉が、その
ことを明示している。

(14) duux(13a)

üzex(13b)



否定の領域で 〈-san⁴〉の完了性が顕著に現れる場合がある。

(15) a. Bagsh nadad nom ögöögüy devter ögsön.

先生 私-[与位] 本 与える-[未完]-[否] ノート 与える-[完]

(先生は私に本はくれませんが、ノートはくれました。)

b. A : Ta ene nomiyg unshsan uu?

あなた-[主] この 本-[対] 読む-[完] [疑]

(あなたはこの本をお読みになりましたか。)

B : Bi ene nomiyg unshix ni baytugay,

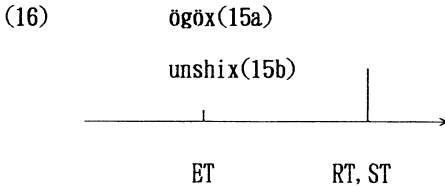
私-[主] 読む-[非過] [3所] ないばかりか

üzee chi güy.

見る-[未完] さえも [否]

(私はこの本を読んだことがないばかりか、見たことさえありません。)

(15a) は、否定表現と肯定表現で意味上の対比を際立たせており、未完了形 〈- aa⁴〉と完了形 〈- san⁴〉とがそれに一役買っている。(15b) は質問と応答からなる談話である。B の動詞の形に注目すると、これは 〈baytugay, ~chi gūy〉という否定の連結形に包み込まれているのが、〈üz -〉は未完了形 〈- aa⁴〉を従えていて、それによって A の 〈- san⁴〉との間に意味上の対比が生じてくるのである。



以上の観察から、〈- san⁴〉の意味には、指示／発話の時間からの事態の時間の先行性と事態の時間の指示／発話の時間との関連性が共通の特徴とすることがわかる。(8 b)、(9 b) での指示の時間は、過去時の指定された一点である。(11)、(13)、(15) では、指示の時間は発話の時間に一致し、現在時である。加うるに、(8 b)、(9 b)、(11)、(13)、(15) の各文は、事態の時間から指示の時間までの時間の広がりを含意している。これらの特徴は、(7) であげた完了的アスペクトの3つの特徴と合致し、完了性の表示こそが、〈- san⁴〉のプロトタイプの意味であることを物語っている。

2. 2. 揺れの現象

〈- san⁴〉は、本来、完了性表示の動名詞形接尾辞であるが、文脈に応じて完了表示か過去表示かのどちらかを指す例も散見される。この種の、いわば意味上の「揺れ」現象を概観していくことが、本節の目指すところである。

小沢 (1978, 1986) が述べているように、〈- san⁴〉は単独で終止形として

用いられるが、指定助詞の〈yum〉を後続させることもある。〈yum〉は談話の中で特有の役割を演ずる要素であるが、詳細な点に関する研究は、いまだ発表されていないように思われる。Street (1962:160) は、「不変化詞 〈yum〉は、基本的には、話者の個人的な関与 (personal involvement of the speaker) を示すように思われる。陳述文の中で 〈yum〉は、しばしば、話者の側での確信 (certainty) 『～のことは事実である (it's a fact that ～)』を示す。」と説明している。また、小沢、他 (1983:602) では、「名詞・動詞 (形動詞形) の後におかれ、それを指定する。」と解説し、日本語の「である、です」に対応する訳を与えている (併せて、小沢 (1978:91) 参照のこと)。³⁾

さて、〈- san⁴⁾〉が〈yum〉の前にたつと、完了的な意味を帯びる場合と過去時の意味を帯びる場合の二通りの場合が観察される。

- (17) a. Bi taniltssan gej xezeeniy bodood l
私-[主] 知る-[相]-[完] [引] ずっと前に 思う-[分] 専ら
baysan yum.
いる-[完] [指]

(私はお知り合いになりたいとずっと以前から思っていました。)

- b. Manay orond xödöö aj axuyg negdeljüülex
私たち-[属] 国-[与位] 農牧業-[対] 統一する-[使]-[非過]
xödölgöön 1959 oniy etsseer duussan yum.
運動 年-[属] 終わり-[具] 完了する-[完] [指]
(我が国では、農牧業を統合させる運動は、1959年の終わりまでに完了したのです。)

(17a) の〈xezeeniy〉や (17b) の〈1959 oniy etsseer〉が時間の幅を明示することで、〈- san⁴⁾〉の完了性が強調されている。

- (18) a. Bi Mongol Ulsiyn Ix Surguulid suraltsaj
私-[主] モンゴル国立大学-[与位] 勉強する-[相]-[連]

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

bayxdaa mongol xel sayn sursan yum.

いる-[時]-[再] モンゴル語 十分に 学ぶ-[完] [指]

(私はモンゴル国立大学で(他の学生たちと一緒に)勉強している時に、
モンゴル語を十分に学んだのです。)

b. Ta xezee irsen yum?

あなた-[主] いつ 来る-[完] [指]

(あなたはいつ来たのですか。)

(18) は 〈- san⁴〉 が過去時を表している文である。(18a) では、過去の
時を指定する副詞節が、「モンゴル語を学ぶ」行為の時点位置づけている。

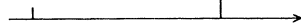
(18b) では、疑問詞 〈xezee〉 が、過去時の軸上の一点に「来る」行為を位置
づけるよう要求している。

(19) a. bodox(17a)

b. surax(18a)

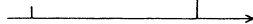
duusax(17b)

irex(18b)



ET

RT, ST



ET, RT

ST

ある種の接続詞に先行する 〈- san⁴〉 が、揺れを見せる場合がある。

(20) a. Gevch tsag ert baysan uchir xün chi

けれども 時間 早い ある-[完] ので 誰 も

ireegüy teatr chi ongoygoogüy.

来る-[未完]-[否] 映画館 も 開く-[未完]-[否]

(けれども、時間が早かったので、誰も来ていないし、映画館も開い
ていません。)

b. Aav irsen chi eej ireegüy.

父 来る-[完] だけれども 母 来る-[未完]-[否]

(父は来ましたが、母はまだ来ていません。)

(20a) は理由の接続詞〈uchir〉を、(20b) は逆接の接続詞〈chi〉をそれぞれ含む文である。後半節に未完了形〈- aa⁴〉を置くことで、〈- san⁴〉の完了性が際立たせられている。

- (21) a. Ted öchigdör oroy kontsert üzexeer
かれら-[主] 昨日 晩 コンサート 見る-[非過]-[具]
yavsan uchir geriyn daalgavraa dutuu xiyyee.
行く-[完] ので 宿題-[再] 不十分な する-[過]
(彼らは昨晚コンサートを見にでかけたので、宿題はできませんでした。)
- b. Öchigdör tenger muuxay baysan bolovch xüüxdüüd
昨日 天気 悪い ある-[完] だけれども 子供-[格]
uuland zugaalaxaar yavjee.
山-[与位] ハイキングをする-[非過]-[具] 行く-[過]
(昨日天気がとても悪かったのですが、子供たちは山にハイキングにでかけました。)

(21a) は理由の接続詞〈uchir〉を、(21b) は逆接の接続詞〈bolovch〉を含んでいる。これらの文は、形式の上から見れば、各々、(20a) と (20b) とに対応している。けれども、〈— san⁴〉の守備範囲に当たる前半節に過去時指示の〈öchigdör〉があることにより、この接尾辞の過去性が確認されるのである。

- (22) a. ert bayx(20a) b. yavax(21a)
 irex(20b) muuxay bayx(21b)

 ET RT, ST ET, RT ST

モンゴル語には、英語の〈who (m), which, that〉のように、関係詞節を形

成する標識がない。その代わりに、動名詞形接尾辞 〈- x, - aa⁴, - dag⁴, - san⁴〉が他の名詞句を修飾するという機能を担っている (Binnick (1979: 84) 参照)。小沢 (1978: 65) のように、名詞類を修飾することがこれらの接尾辞の本来の機能であるという立場をとり、「形動詞 (形容詞的な職能をもった動詞の一変形 (小沢 (1986: 92) 参照))」と呼ぶ研究者もいる。それ程までに、名詞句の修飾表現として働く例が数多く見出されるのである。ここでは、〈- san⁴〉に限って観察する。

- (23) a. Süxbaatar 1919 onoos exlen niyslel Xüreend baysan
 スフバートル 年-[奪] 以来 首都 フレー-[与位] ある-[完]
 xevlex üyldvert ajillajee.
 印刷所-[与位] 働く-[過]
 (スフバートルは、1919年から首都フレーにあった印刷所で働いていました。)

- b. Öngörsön tavin jild manay ard tümniy aj amidral
 過ぎる-[完] 50 年-[与位] 私たち-[属] 人々-[属] 生活
 ix öörchlögdölö.
 大変 改善される-[過]
 (過去 (lit. 過ぎた) 50年間の間に、我が国民の生活は大いに改善されました。)

- c. Yer ni deer üyees ündesniy muzeydee
 一般に ずっと以前-[奪] 民族-[属] 博物館-[与位]-[再]
 xovor sonin üzmer begleseer irsen xün
 稀な 興味深い 展示物 準備する-[継] 来る-[完] 人
 manayd olon biy.
 私たち-[与位] たくさん いる
 (一般に、ずっと以前より民族博物館に珍しい興味深い展示物を用意し続けてきた人は、我が国にたくさんいます。)

(23) の修飾句の〈- san⁴〉は、過去のある時点から指示の時間までの継続を含意している。(23a) の行為の起点を表す〈1919 onoos exlen〉は、直接には述語動詞〈ajillajee〉にかかるが、働く場所も働く行為に伴って、少なくとも1919年から指示の時間まで継続して存在していたと解釈できる。

(23b) では、〈öörchlögdlöö〉と断定する指示の時間まで50年の期間のあったことを、修飾句は示している。(23c) の述語は現在時を指すが、修飾句内の副詞句〈deer üyes〉と継続の副動詞形〈- saar⁴〉とが、過去のある時点から現在時までの行為の継続を表している。

このように、(23) の〈- san⁴〉は、事態の時間が指示の時間と関連性をもち、時間的な広がりを展開するので、完了表示であると規定することができる。

- (24) a. Ulaanbaatar xot bolon oron nutgiyn büsees shalgarsan
 ウランバートル 市 と 地方-[属] 地域-[属] 選ぶ-[完]
 120 garuy böx ulsiyn avargiyn toloo uran mex,
 以上 力士 全国-[属] チャンピオン-[属] ために 巧みな 技
 avxaalj sambaagaa sorij barildlaa.

機敏さ 機転-[再] 試みる-[連] 相撲をとる-[過]

(ウランバートル市と地方から選抜された120名余りの力士たちが全国チャンピオンになるために、巧みな技や機敏さを試しながら、相撲をとりました。)

- b. Öchigdör irsen xün end suuj bayna.

昨日 来る-[完] 人 ここに 住む-[連] いる-[現]

(昨日来た人は、ここに住んでいます。)

- c. Ööriynxöö bolon aav, eej, ax, egch, düü nariynxaa

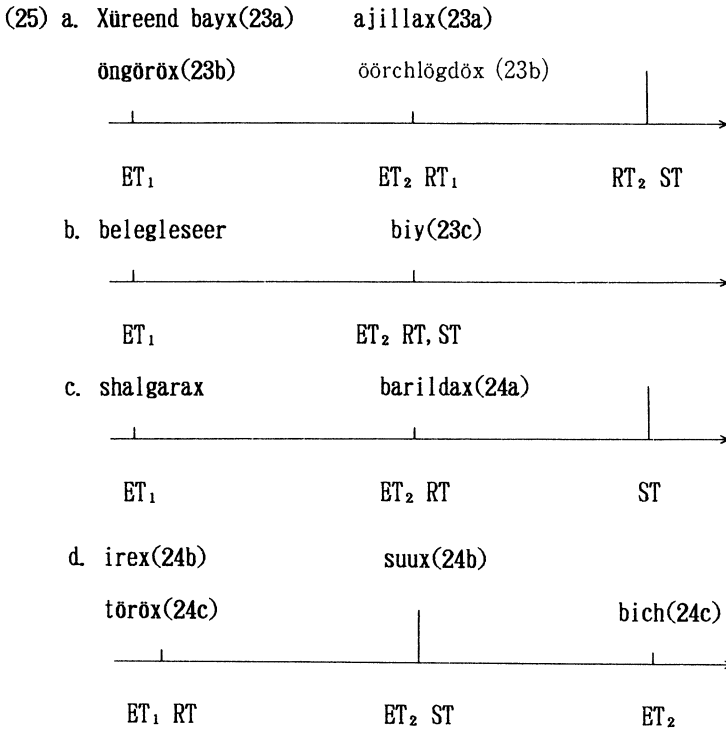
自分-[属]-[再] と 父 母 兄 姉 弟、妹 たち-[属]-[再]

töršon on, sar, ödriyg bich.

生まれる-[完] 年 月 日-[対] 書く-[2命]

(自分と父、母、兄、姉、弟、妹たちの生まれた年月日を書きなさい。)

(24) の各修飾句の〈- san⁴〉には、完了的な意味合いはないように思われる。(24a) では、文全体のつながりから、「相撲をとる」時間に「選抜される」時間が先行することは明白である。(24b) の修飾句には過去時を指す〈öchigdör〉があるため、「来る」時間は過去の行為であることがわかる。(24c) の「生まれる」という事態は、それが適用されるなら、当然、過去時に属することになる。



修飾句は埋め込み要素であるので、述語のテンス、アスペクトの中に修飾句のテンス、アスペクトが包み込まれる形になる。この二重構造を表すため、Reichenbach (1947) の図 (4) には多少の修正が必要である。(25a) では修飾句の事態 ET₁を指示する時間 RT₁があり、それと指示の時間に起こった事態 ET₂を全体的に捉える指示の時間 RT₂がある。これは、(4 a) の過去完了の図

式の変異形である。(25b)は、指示の時間にかかる事態 ET₂が加わっただけの現在完了 (4 c) の変異形である。一方、(25c)は、指示の時間と一致する ET₂が参与しただけの (4 b) の過去形の変異形とみなすことができるだろう。

モンゴル語では、過去時の否定形は、一般に、〈- san⁴〉に否定形小辞 〈- güy〉を付けて形成される。Poppe (1951:82)は、この形が過去形の 〈- v〉の否定形に対応すると述べているが、同様に、〈- laa⁴〉や 〈- jee / - chee〉の否定形でもある。3つの過去形接尾辞は、否定形において 〈- san⁴güy〉に中和するのである。但し、〈- san⁴〉が完了的な意味を保持したままで否定されている事例も、若干ながら見出せる。

- (26) Teregh Luvsan 50 garuy naslaxdaa tiym tom
車引き ロブサン 以上 齢をとる-[時]-[再] このような 巨大な
shuvuu üzsengüy.
鳥 見る-[完]-[否]
(車引きのロブサンは50才余りの年齢になるまで、こんな大きな鳥を見たことはありませんでした。)

ここでは、時点の副詞節が「まで」のように期限を表し、時間の幅を明示することになる。〈üzsengüy〉は50年以上の年月の中で「見る」ことを否定しているのであり、完了的な意味が出てくるのである。

(26) のように文脈が整えさえすれば 〈- san⁴〉の否定形は完了表示を担い得るのだけれど、数の上では過去表示の否定の意味の方が圧倒的に多い。

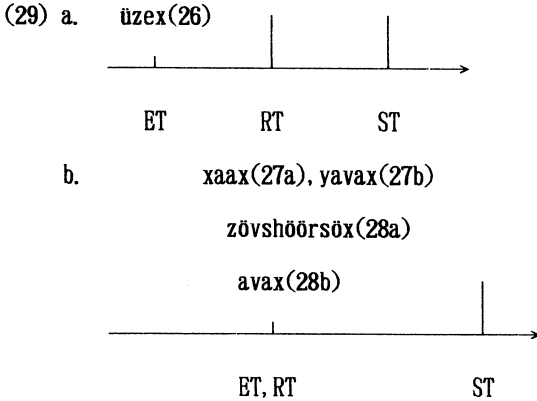
- (27) a. Batbayar gerees garaxdaa üüdee xaasangüy.
バトバイラル 家-[奪] 出る-[時]-[再] ドア-[再] 閉める-[完]-[否]
(バトバイラルは家を出る時に、ドアを閉めませんでした。)
- b. Bid Batiyn gerees garaad naash ni
私たち-[主] バト-[属] 家-[奪] 出る-[分] こちらへ [3所]
yavsangüy, tsaash ni yavlaa.
行く-[完]-[否] 向こうへ [3所] 行く-[過]

(私たちはバトの家を出て、こっちへ行ったのではなく、そっちへ行きました。)

(27a)は、時点の副詞節が「ドアを閉めない」事態の発生する時を指定している。(27b)は分離の副動詞形により、時間の軸に沿った一連の出来事が描かれている。後半節は否定形はさんでの相対立する2つの部分からなり、〈naash ni〉と〈tsaash ni〉、〈yavsangüy〉と〈yavlaa〉が対立関係を形の上から支えている。この関係にあって、〈- san⁴〉は過去表示〈yavlaa〉を否定する働きをしていると解釈できるのである。

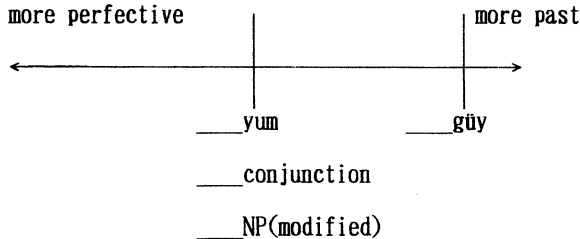
- (28) a. Bi gertee xarimaar baylaa. Bagsh zövshöör söngüy.
私-[主] 家-[与位]-[再] 帰る-[願] いる-[過] 先生 同意する-[完]-[否]
(私は自分の家に帰らなかった。先生は(それに)同意しませんでした。)
- b. Bid xoyor önödör nomiyn delgüürt ochloo. Gevch nom
私たち-[主] 二人 今日 書店-[与位] 行く-[過] しかし 本
avsangüy.
買う-[完]-[否]
(私たち二人は、今日、本屋に行きました。けれども、本は買いませんでした。)

(28)は時間的な隔たりのない過去時の一連の出来事を記述した談話である。どちらの談話も、第1文で過去形の〈- laa⁴〉が述語を作り、その内容をうけて、〈- sangüy〉が否定の内容を与えるという形をとっている。この否定は過去時の事態の否定である。



以上のことから、〈- san⁴〉は出現の環境が同じような場合でも、文脈によって完了表示と過去表示との間に揺れがあることがわかった。これは、本来完了のアスペクト接尾辞である〈- san⁴〉が、使用域の拡大と共に意味上の広がりをも獲得する過程を示しているように思われる。共時態での完了表示から過去表示への移行的拡張は、様々な文形式で段階的な揺れの度合いを見せている。〈yum〉や接続詞、修飾句では、完了表示と過去表示の占める割合が均等に近いのに較べて、〈- güy〉との結合では、過去表示の占める割合が大きくなっている。いわば、否定形での過去表示への中和現象が見られるのである。

(30) 揺れの度合い



上図のような段階的な揺れを見せながら、〈- san⁴〉は過去表示の接尾辞としてのステイタスを最終的に獲得するに至ったと考えることができる。

2. 3. 過去表示

モンゴル語には、時間軸上の過去時に事態を位置づけるテンス表示接尾辞〈- laa⁴〉、〈- jee / - chee〉、〈- v〉が存在する。このうち〈- v〉は、疑問文以外では口語であり使用されず、代わりに、〈- san⁴〉が過去形接尾辞として頻用されていることが、Poppe (1970)、Vietze (1978)などで指摘されている。そこで、〈- san⁴〉の過去形用法の実例を見ながら、事実確認をしていくことにしよう。

- (31) a. *Öchigdör bi nom unshlaa / unshiv / unshsan.*

昨日 私-[主] 本 読む-[過] -[過] -[完]

(昨日私は本を読みました。)

- b. *Mongol ardiyn xuvigal 1921 ond yalsan.*

モンゴル 人々-[属] 革命 年-[与位] 勝つ-[完]

(モンゴル人民革命は1921年に勝利をおさめました。)

(31a) では過去時を特定する 〈*öchigdör*〉があり、しかも、意味を変えずに3つの接尾辞を交替させることができる。(31b) には副詞句 〈1921 ond〉が現れていて、出来事の過去時における特定化を行う。

- (32) a. *Taniyg töröxöd eej tani xeden nastay*

あなた-[対] 生まれる-[時] 母 [2所] いくつか 年齢-[共]

baysan be?

いる-[完] [疑]

(あなたがお生まれになった時、お母様はおいくつでしたか。)

- b. *Setgüülchiyg ter malchintay uulxaxad bi xamt baysan.*

新聞記者-[対] その 牧人-[共] 会う-[時] 私-[主] 一緒にいる-[完]

(新聞記者がその牧人に会った時、私は(彼と)一緒にいました。)

(32) は時間を指定する副詞節と 〈- san⁴〉の述語を含む主節とから成る複文で

ある。副詞節の指す時点での「年齢」及び「存在」が、それぞれ、述べられている。

- (33) a. Tsetseg boroo orson gej xellee.

ツェツェグ 雨 降る-[完] [引] 言う-[過]

(ツェツェグは雨が降ったと言いました。)

- a'. Tsetseg boroo orno gej xellee.

降る-[現]

(ツェツェグは雨が降ると言いました。)

- b. Tüürüü neg xeseg ajil tum ix baysan,

ちょっと前 一部分 仕事 非常に たくさん ある-[完]

oyrdoo ovoo gaygüy shig bayna.

最近 悪くない 大丈夫だ の様に いる-[現]

(ちょっと前まで大変忙しかったのですが、最近はまだです。)

(33a) は間接話法の文で、引用節内に〈-san⁴〉が登場している。

(33a') でわかるように、モンゴル語には英語の主節動詞により引き起こされる時制の移行現象 (tense shift) はない。引用節の時制は主節の時制から独立しており、過去時の出来事を表している。(33b) は過去時と現在時との対比を際立たせる文である。コンマの前が過去時の事態を、後が現在時の事態を記述していて、副詞句の〈tüürüü〉と〈oyrdoo〉が対比関係を補強している。

- (34) a. A : Tegeed билет авав uu?

その後 切符 買う-[過] [疑]

(その後切符を買いましたか。)

B : Avsan. Xarin нөгөөдрийн билет авлаа.

買う-[完] しかし 明後日-[属] 買う-[過]

(買いました。でも、明後日の切符をかいました。)

- b. M. Gorikyin zoxyool 《Ex》 gedeg romanyig unshlaa.

ゴーリキー-[属] 作品 母 言う-[習] 長編小説-[対] 読む-[過]

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

Bas mongoliyn zoxyoolchdiyn xeden shüleg nayraglal
また モンゴル-[属] 作家-[格]-[属] いくつかの 詩 長編叙事詩
unshsan.
読む-[完]

(M. ゴーリキーの作品『母』という小説を読みました。また、モンゴルの作家たちの幾編かの詩や叙事詩をよみました。)

(34a) は対話である。A は過去形の 〈- v〉 で尋ね、B は同じ動詞に完了形 〈- san⁴〉を付けて答えている。しかも、補足的な説明の文では、同じ動詞に過去形の 〈- laa⁴〉を用いている。この3つの形は、一連の過去時の出来事を述べており、意味上の相違はない。(34b) は2つの文で構成された談話である。話者の読書体験を語っているが、2つの文は内容的に等位関係にあり、〈- laa⁴〉と 〈- san⁴〉とは意味を変えずに交替している。

〈- san⁴〉は、対格形接尾辞をとることで、その導く節全体が主節の他動詞の目的語になるような述語要素として機能する。このような節を目的語節と呼ぶことにする。

(35) a. Tanay xelsniyg bi medsen.

あなた-[属] 言う-[完]-[対] 私-[主] 知る-[完]

(あなたのおっしゃったことはわかりました。)

b. Bagsh taniy shalgaltaa sayn ögsniyg

先生 あなた-[属] 試験-[再] りっぱな 与える-[完]-[対]

nadad yarisan.

私-[与位] 話す-[完]

(先生は、あなたが試験をりっぱにうけたことを私に話しました。)

c. Mongoliyn ard түмний amidral xuvigalaas ömnö

モンゴル-[属] 人々-[属] 生活 革命-[奪] 前に

yamar baysan, xuvigaliyn daraa yamar bolsniyg

どのような ある-[完] 革命-[属] 後で なる-[完]-[対]

ūzej bolno.

見る-[連] できる-[現]

(モンゴルの人々の生活が、革命前にはどんなであったか、革命後にはどんなになったかを見ることができます。)

下線の部分が目的語節である。(35a, b) は、目的語節と主節双方に 〈- san⁴〉のある例であるが、目的語節で描かれた事態は過去時に属していることがわかる。(35c) は、主節述語が現在形 〈- na⁴〉をとり、指示の時間も発話の時間も現在時であることを示す。他方、目的語節の事態は過去時に位置づけられている。

目的語節と形の上で似ている構文に与位格節がある。これは 〈- san⁴〉に与位格形接尾辞が付いて形成される。

- (36) a. Tantay taniltssandaa ix taatay
あなた-[共] 知り合う-[完]-[与位]-[再] 非常に うれしい
bayna.
いる-[現]

(はじめまして、どうぞよろしく。lit. (あなたとお知り合いになれて、とてもうれしいです。))

- b. Uulzaltad oroltsogchdiyn ömnöös K. Gros iynxüü
会見-[与位] 参加者-[グ]-[属] に対して このように
xüleen avch yariltssand M. S. Gorbachevt
接見する-[連] 話す-[相]-[完]-[与位] -[与位]
talarxal ilerxiylev.
謝意 表明する-[過]

(会見に参加した人たちに対して、K. グロスがこのような接見した際に、M. S. ゴルバチョフに謝意を表明しました。)

(36a) は慣用的な表現であり、与位格節の事態の先行することが「うれしい」感情の生じる前提になっている。(36b) は与位格節の事態と主節の事態とが同時であるが、共に過去時の軸上に位置を占めている。

Street (1962: 227) は、〈- san⁴〉と所有不変化詞 〈ni〉、もしくは再帰所有形 〈- aa⁴〉で終わる連鎖が、ある環境で副詞句として機能する事例に言及している。このような副詞句を、彼は、「絶対所有連鎖 (absolute possessive sequence)」と呼んでいる。

- (37) a. Manay üüdiyg neg xün togshiv. Üüdee neesen
 私たち-[属] ドア-[対] 1 人 叩く-[過] ドア 開ける-[完]
 ni, nōxōr Baatar bayv.
 [3所] 友人 いる-[過]
 (私たちの(部屋の)ドアを誰かがノックしました。ドアを開けると、
 友人のバートルがいました。)
- b. Gertee xarij irsen ni, manay üüden
 家-[与位]-[再] 帰る-[連] 来る-[完] [3所] 私たち-[属] ドア
 deer ulaan torgon alchuurtay büsgүй zogsoj
 に 赤い 絹の スカーフ-[共] 女性 立っている-[連]
 bayna.
 いる-[現]
 (家に帰って来ると、私たちの(家の)ドアの所に赤い絹のスカーフを
 着けた女性が立っているのです。)

「絶対所有連鎖」は英語の独立分詞構文と類似しており、主節で語られる事柄の背景を導入する機能を担っている。(37b) の主節動詞は現在形であるが、これはいわゆる「物語の現在形」で、文全体の描く事態は過去時であると言って差し支えない。

以上の例から、〈- san⁴〉が文末の終止形として用いられる場合、あるいはいくつかの文形式に現れる場合、完了的な意味を失い、単に、指示の時間／発

話の時間からの先行性を表す過去表示であることが確認できた。このような〈-san⁴〉は、過去形〈-laa⁴、-jee / chee、-v〉と意味を変えずに交替可能なテンス表示の形式とみなせるのである。

2. 4. まとめ

〈-san⁴〉は完了的アスペクト形として〔先行性〕、〔広がり〕、〔関連性〕を併せ持っている。このうち〔関連性〕が欠落することで〔広がり〕の含意も失われ、〔先行性〕だけを有する過去表示へと意味上の移行が起こったと考えられるのである。移行の中間段階として、完了表示か過去表示のどちらかを示す「揺れ」の現象が観察される。

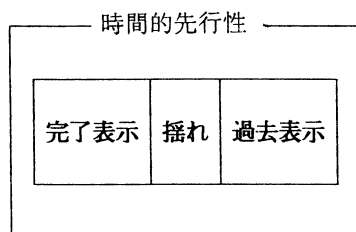
(38) 〈-san⁴〉の意味の移行過程

Perfective → Perfective / Past → Past

(38) は通時的变化を示すものではなく、共時態での意味の拡張を示すものである。したがって、〈-san⁴〉の完了表示、完了／過去表示、過去表示の3つの意味は、出現の環境は異なるにしても、共時態のレベルで共存しているのである。

完了表示と過去表示とが共有する特徴は、〔指示／発話の時間からの事態の時間の先行性〕であるから、これを媒介にして2つの意味は結びついている。

(39) 〈-san⁴〉の意味



(39) が示すように、〈- san⁴〉は時間的先行性という大きな意味領域を持ち、その下位領域として2つの意味が部分的に重なる形で結び合わさっているのである。

3. 先行性の拡張

〈- san⁴〉の意味のプロトタイプが完了表示である限り、それは時間の概念化と深く係わっている。完了表示から過去表示へと意味上の移行を経た後でさえも、時間の概念化の枠内にとどまるのである。

ところで、〈- san⁴〉の用例をつぶさに検討していくと、一見、時間との結びつきがないと思われるものにぶつかる。「非・時間的」と名付けてもよいような用法は、〈- san⁴〉のプロトタイプの意味とどのように関連づけられるのだろうか。具体的なデータを分析しながら、時間的な意味と非・時間的な意味との接点を探っていくことが、本節の目的になる。

3. 1. 心的先行性

3. 1. 1. 仮定、譲歩

- (40) a. Eejiyg ajildaa yavbal bi geree
母-[対] 仕事-[与位]-[再]行く-[条] 私-[主] 家-[奪]
tseverlene.

掃除する-[現]

(母が仕事に行くなら、私は家を掃除します。)

- b. Eejiyg ajildaa yavsan bol bi geree tseverlene.

行く-[完][条]

(母が仕事に行ったなら、私は家を掃除します。)

(40) は、条件文である。a と b の形式上の違いは、条件形が直接動詞語幹に付加されたか、〈- san⁴〉を介して間接的に接続しているかである。意味上の違いは、a の〈bal⁴〉節が掃除をするための条件を提示しているのに対して、

b の〈bol〉節は仮定を提示している。「母が仕事に行く」事態が話者の仮定世界ではすでに実現していて、それが現実世界では未来時に属する「掃除をする」行為につながっているのである。

(41) a. Bi yaasan chi yavaxgüy.

私-[主] どうする-[完] しても 行く-[非過]-[否]

(わたしはどうあっても lit. (何をしたとしても) 行きません。)

b. Bi üksen chi yasiy ni andaxgüy.

私-[主] 死ぬ-[完] しても 骨-[対] [3 所] 間違う-[非過]-[否]

((死んでも骨を間違わないの意で)私は彼を大変よく知っています。)

lit. (私は死んだとしても、彼の骨を間違いません。)

(41) は譲歩節を含む文である。前半節では、現実世界では実際にあり得ないがあり得るような可能世界を想定して、その中で起こった事態を、後半節で否定するのである。

(42) a. Chi ene nomiyg namayg unshasaniy daraa

君-[主] この 本-[対] 私-[対] 読む-[完]-[属] 後で

unshaaray.

読む-[願]

(君は、この本を私が読んだ後で読んでください。)

b. Namayg yavsnaas xoysh geree tseverleerey.

私-[対] 行く-[完]-[奪] 後で 家-[再] 掃除する-[願]

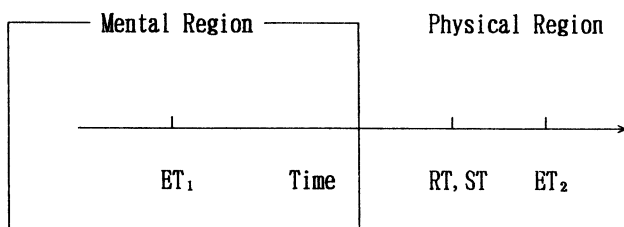
(私が出た後で家を掃除してください。)

(42a) の〈daraa〉節の「本を読む」行為も、(42b) の〈xoysh〉節の「家から出る」行為も、実際にはまだ行われていない。そうした行為がすでに実現したものと仮定した前提に立って、主節の願望を表明しているわけである。

(40)、(41)、(42) からわかるように、話者は現実世界とは別に自分自身の心的領域内にもう 1 つの世界を構築し、その世界の中で事態を概念化し、實在

性のあるものとして設定するのである。この心的世界にも、現実世界とは別に
もう1つの時間が存在しており、そこでの時間の軸上に、事態はすでに起こっ
たものとして位置づけられるわけである。(40)、(42)の条件・仮定節も、(41)
の譲歩節も、心的世界の時間で先行性をもつ事態を表すのである。これを図示
すると、次のようになる。

(43) Temporal Anteriority Relation



ET₁は仮定や譲歩節の事態の時間を、ET₂は主節の事態の時間を表す。

話者の心的領域内で、事態が時間的にすでに先行してあるものとして概念化
されている場合、その事態は「心的先行性 (Mental Anteriority)」をもつと定
義することにしよう。(43)のタイプの先行性は、現実の発話の時間から心的
領域内の事態の時間が先行すると解釈できるので、第2節で論じた時間的前行
性との間にある程度の関連性を認めることができる。

3. 1. 2. 修飾句

第2. 2節で、修飾句が完了表示と過去表示とを表す揺れの現象の環境を作
ることを見た。ところが、時間的前行性を含意しない例が見いだされる。

- (44) a. Getel xaragdaxgüy yum bol bayxgüy
 しかし 見る-[受]-[非過]-[否] 物 [主題] ある-[非過]-[否]
 yum gesen batlagaa ügüy.
 物 言う-[完] 確証 [否]

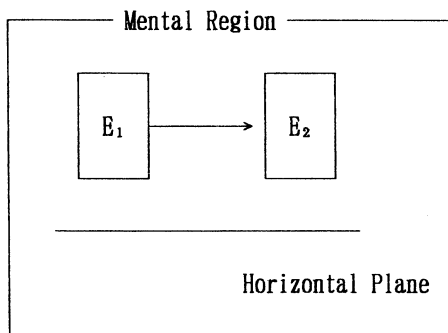
(しかし、見えない物は存在しない物であるといった確証はありません。)

b. Ta ööriyn medex öngö, xelber,
 あなた-[主] 自分-[属] 知っている-[非過] 色 形
 dürs zaasan neree tüüj bich.
 外形-[グ] 示す-[完] 名前-[再] 集める-[連] 書く-[2 命]
 (あなたは、自分の知っている色、形などを示した名前を集めて記し
 なさい。)

a は確証の中味を特定する目的で〈- san⁴〉が修飾句を率いている。これは心的領域内に修飾句の示す確証の内容を予め概念化しておいて、それを〈bat - laгаа〉に引き当てるという解釈の仕方を考えることができる。同様に、b も、既知の色や形を心的領域内に1つ1つ前もって置いてから、その後で、各々に正しい名称を当てはめていく過程を思い描くことができる。

(44) の〈- san⁴〉には時間的先行性の含意はないけれど、空間的先行性の含みは確かにあるのである。そして、時間的なものが空間的なものへ転移すること、反対に、空間的なものが時間的なものへ転移することは、認知の仕方の中で一般に知られている事柄である。(例えば、英語の前置詞〈at, in, for, before, after〉などが、時間表示にも空間表示にも用いられるという事実がある。)

(45) Spatial Anteriority Relation



(44) の〈- san⁴〉の意味は、(45) で図示したように、心的領域という空間の中の水平面に沿った2つの事態 E₁ と E₂ との順序づけに基づく先行関係と捉え

ることができよう。被修飾句の表す E₂を基点に、修飾句の表す E₁が E₂より前に位置づけられるのである。

3. 1. 3. 比較構文

〈-san⁴〉は比較構文で現れる。比較要素と被比較要素が動詞である場合、動詞語幹に〈-san⁴〉が付き、被比較要素は奪格形をとり、比較要素は3人称所有形を従える。

- (46) a. Us uusnaas tsay uusan ni deer.
水 飲む-[完]-[奪] 茶 水-[完] [3所] よりよい

(水を飲むよりお茶を飲む方がよい。)

- b. Temeegeer yavsnaas moryoor yavsan ni deer.
ラクダ-[具] 行く-[完]-[奪] 馬-[具] 行く-[完] [3所] よりよい
(ラクダで行くより馬で行く方がよい。)

(46)の各文には、完了性の意味も過去性の意味もない。2つの比較の対象となる行為が較べられているだけである。

比較の操作においては、2つの等価と思われる事態が話者の心的領域に設定され、どちらにより高い価値を与えるかを決定する。2つの事態は、必ずしも形式として具現される必要はない。比較要素だけが現れる場合もある。

- (47) Salxivchaa xaasan ni deer.
通風口-[再] 閉める-[完] [3所] よりよい
(通風口は閉めたほうがよいです。)

被比較要素に比較要素と対立する〈salxivchaa neesnees 「通風口を開けることより」〉を想定することができるが、形式としては実現せず、話者の心的領域内で概念化されるにとどまっている。

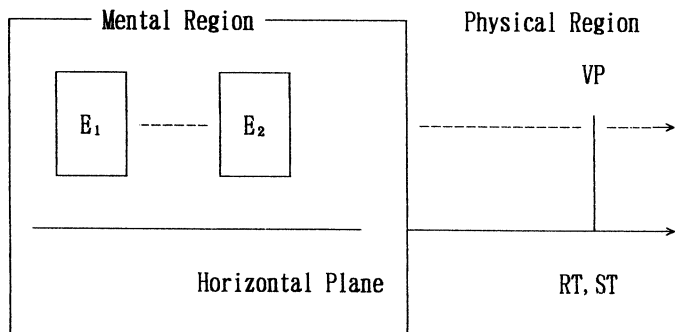
比較構文は、被比較要素が比較要素に先行する語順をもつが、価値の優劣関

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

実体としてあるのである。実在しているからこそ、手に取りながら、あるいは、指し示しながら、「これよりそれの方がよい。」と言明するのと全く同じ仕方で優劣の判断を下すことができるのである。

諸者の心的領域内で事態が概念化され、客観的な実在性をもつということ、あたかも目の前に横たわっている知覚可能な物体のように、抽象度の高い事態が心的世界に内包されていること、このような様態も心的先行性の事例に数えることができるだろう。話者の認知活動の中で、すでに概念化されているがゆえに、2つの事態は比較できるのである。

(49) Spatio-Temporal Anteriority Relation



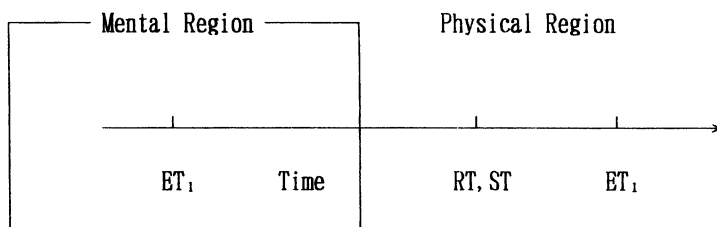
☆VPは「視点」を表す。

3. 1. 4. 慣用的表現

〈- san⁴〉はいくつかの慣用的表現に登場する。

- (50) a. Bi üsee xaraar buduulax gesen yum.
私-[主] 髪-[再] 黒い-[具] 染める-[使]-[非過] 言う-[完][指]
(私は髪を黒く染めてもらうところです。)
- b. Bi Xödöö Aj Axuyn Deed Surguuli deer ochix
私-[主] 農業大学 に 行く-[非過]

(52) Temporal Anteriority Relation



☆ET₁ ' はET₁ の投影されたもの。

- (53) a. Gadaa tenger tselmeg chi gesen xüyten bayna.
 外 天気 晴れた [強助] 言う-[完] 寒い ある-[現]
 (外は天気がいけれど、寒い。)

b. Gadaa tenger tselmeg bolovch xüyten bayna.
 だけれども

- (54) a. Ene gutal ix ünetey chi gesen sayxan gutal.
 この ブーツ とても 高価な よい
 (このブーツはとても値段が高いですが、よい靴です。)

b. Ene gutal ix ünetey bolovch sayxan gutal.

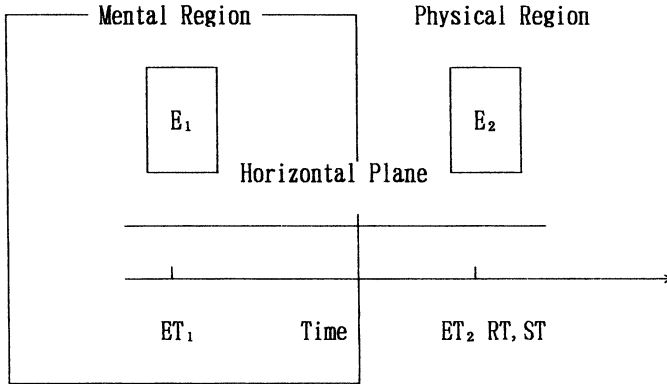
強意の助詞 〈chi〉と完了形 〈gesen〉の組み合わせは、逆接の接続詞として機能する。この結合体は、意味的に 〈bolovch〉と対応する。

逆接の 〈gesen〉は、(51) の 〈gesen〉よりも時間的な意味合いは希薄である。但し、対応形 〈bolovch〉が、元々、〈bolox〉に譲歩の接尾辞 〈- ch〉が付加してできたのと同様に、〈chi gesen〉にも譲歩的な含意が存在しているように思われる。これは、第3. 1. 1節で採り上げた「仮定、譲歩」の 〈- san⁴〉を想起させる。ただ、「仮定、譲歩」では、主節の事態は未来時に位置づけられたが、(53)、(54) では、後半節の事態は現在時に位置づけられる。

さらに、(53a)、(54a) は、第3. 1. 3節で検討した比較構文とも類似している。前半節で提示した事態をいったんは認めた上で、後半節はそれを一部

否定するような値の事態を導入するのである。比較構文では2つの異なる事態の価値判断が述べられたが、〈chi gesen〉では、1つの同じ事態について相対立する価値判断が語られるのである。

(55) Spatio-Temporal Anteriority Relation



複合語に参加する構成要素に〈- san⁴〉の現れる場合がある。

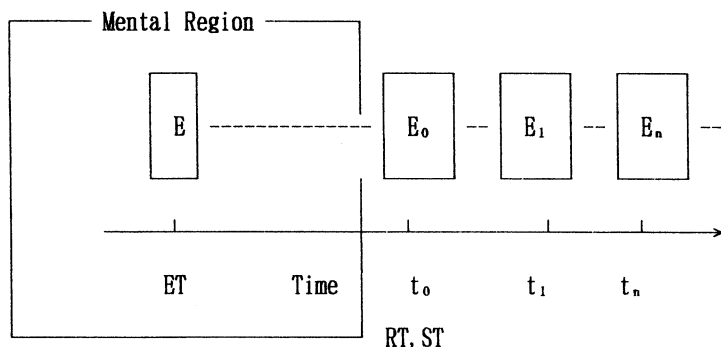
- (56) a. tagnayshsan giygüülegch
 口蓋化する-[完] 子音
 (口蓋化子音)
- b. sengenesen üner
 よい匂いが漂う-[完] 香り
 (香気、芳香)
- c. oyr dashlan suusan ger
 近くに 隣接する-[連]ある-[完] 家
 (隣接家屋)
- d. saya saasan süü
 ちょうど今 搾乳する-[完] 乳
 (搾りたての乳)

複合語の主要部は名詞であり、複合語全体も1つの単位として名詞の範疇に入る。名詞は、一般に、それ自体無時間的であるから、(56)の複合語も時間上の制約から解き放たれているはずである。では、なぜ、無時間的性質の名詞複合語の内部に〈- san⁴〉が用いられているのだろうか。

〈- san⁴〉のプロトタイプの意味は完了表示であった。完了性の特徴には、〔指示／発話の時間からの事態の時間の先行性〕と〔事態の時間と指示／発話の時間との関連性〕があった。第2．3節で言及したように、このうち後者の特徴が落ちると、過去表示への移行が生じた。反対に、前者の意味が落ちると〔過去性〕の含意がなくなり、〔事態の結果の存続性〕が顕著になってくる。過去時のある時点で出現した事態が、指示／発話の時点に存在し、将来においても存在し続けるという含意である。指示／発話の時間（現在時に属する）から未来時へと延びる存続性は、時間を明示する要素、もしくは文脈がない限り無時間的である。すなわち、時間の軸が未来時に向かって無限に志向していくのに対応して、事態も存在し続けると考えられるのである。複合語の〈- san⁴〉も、〔先行性〕を失い〔関連性〕だけを保持した事例である。

aの子音は「口蓋化した」結果の状態を、bの香りは「よい匂いが漂った」結果の状態を、cの家は「近くに隣接した」結果の状態を、dの乳は「たった今搾った」結果の状態を、それぞれ典型的な特徴として有しているのである。

(57) Spatio-Temporal Anteriority Relation



複合語の〈- san⁴〉は、時間的な先行性、あるいは空間的な先行性を心的領域内に押し止めてほのめかしながら、その結果の状態を際立たせる働きをするのである。

〈- san⁴〉が語の要素として現れる例がある。

- (58) a. Ongotsniy buudal xotoos xol bolovch bid
飛行場 町-[奪] 遠い けれども 私たち-[主]
udsangüy irlee.

間もなく 来る-[過]

(飛行場は町から離れていましたが、私たちはほどなくして到着しました。)

- b. Ter yavaad udsangüy tsaas xarandaa barij
彼-[主] 行く-[分] 紙 鉛筆 もつ-[連]
irev.

来る-[過]

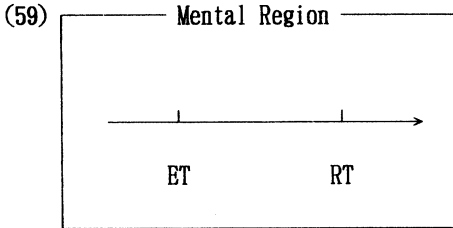
(彼は行ってほどなくして紙と鉛筆を持って来た。)

文中の副詞〈udsangüy〉は、動詞〈ud - 「時間がかかる」〉、完了形〈- san⁴〉否定形〈- güy〉に分析できる。このままの形で用いられる固定した形式であるが、意味的には時間の幅を暗示しているように思われる。aでは、飛行場と町との距離から、到着するまでのあいだにある程度の時間のかかったことが推察できる。bでは、行ってから紙と鉛筆を持って戻って来るまでの間に、その動作をするのにかかる時間の経過を予測することが可能である。

〈udsangüy〉の意味の一部分として、事態の始発点から終端点までのある程度の時間の広がり の指示を含んでいるのである。これは〈- san⁴〉の完了性の特徴の1つ、[事態の時間から指示／発話の時間までの時間の広がり]に照明をあてた事例と考えられる。

〈udsangüy〉は副詞としてそれ自体は特定の時間表示に関与しないが、意味の一部に時間の幅は概念化されているのである。この概念化を心的領域に写

像して捉えると、次のようになる。



(59) の図式は、ST（発話の時間）を欠くことで、現実世界との接点はなく、あくまで語内部に〈- san⁴〉の意味の及ぶ範囲が限定されることを表している。

3. 2. 知覚的先行性

第3. 1節で、現実世界とは別の話者の心的領域の中で、〈- san⁴〉が時間的空間的な先行性を指示する例を見た。そのうち、心的領域内の時間的先行性と現実世界において対応するものが、完了表示や過去表示である。では、心的領域内の空間的先行性に対応するものが、現実世界においても存在するのだろうか。数こそ少ないとはいえ、そのような例を見つけることはできる。

(60) a. End manay orniy soyoliyn xөгjiyig

ここに 私たち-[属] 国-[属] 文化-[属] 発展-[対]

xaruulsan xeseg biy.

見る-[使]-[完] 部門 ある

(ここには我が国の文化の発展をみせたコーナーがあります。)

b. Tend manay orniy üyldver, xөdөө aj axuy, soyol, urlag.

そこに 工業 農牧業 文化 芸術

gadaad xariltsaanii xөгjiyig xaruulsan olon

外国の 関係-[属] 発展-[対] 見る-[使]-[完] たくさんの

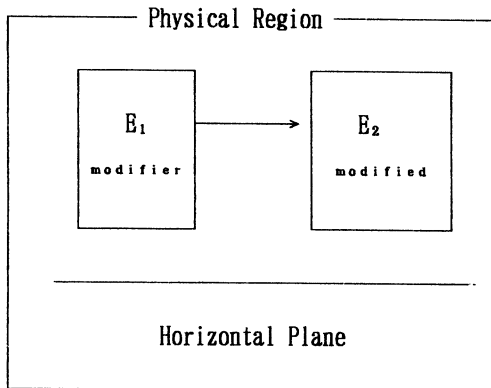
sayxan zurag bayna.

美しい 写真 ある-[現]

(そこには我が国の工業、農牧業、文化、芸術、外交関係の発展を見せたたくさんの美しい写真があります。)

博物館のような場所で、展示物を眺めながら解説しているガイドの姿を、想像することができるかもしれない。〈- san⁴〉が率いる句は修飾句であり、接続する名詞句の内容を特定しているのであるが、〈xaruulsan〉は被修飾名詞句の指示対象を視覚という知覚の領域内で空間的に認知していることを示している。目の前に実際にある対象を一定の距離を置いた視点から見ているのである。これは、第3. 1. 2節で考察した修飾句の場合と平行な関係にある。但し、先の修飾句の〈- san⁴〉が心的領域という心理的空間に被修飾名詞句の指示対象を位置づけたのに対して、(60)の修飾句の方は、現実世界の空間に指示対象を位置づけている点が異なる。

(61) Spatial Anteriority Relation



3. 3. まとめ

〈- san⁴〉の非・時間的先行性は、心的先行性と知覚的先行性に区分することができた。心的先行性は、現実世界の時間軸に沿った事態の把握の仕方とは別に、話者の心的領域内で展開する事態を扱うので、「非・時間的」先行性

の分類に入れたのである。しかしながら、心的領域内で事態を時間的な順序に従って位置づけるもの、時間的な順序に空間的な配置を加味して位置づけるもの、さらに、純粹に空間的な配置のみから位置づけるものと、3つのタイプが確認された。

(62) 心的先行性(Mental Anteriority Relation)

時間的先行性		空間的先行性
<p>假定、譲歩</p> <p>-x gesen yum</p> <p>複合語、udsangüy</p>	<p>比較構文</p> <p>chi gesen</p>	<p>修飾句</p>

知覚的先行性に関しては、時間的先行性と同じく現実世界の事態を扱うにもかかわらず、時間とは何ら関係しない点で「非・時間的」と呼ぶのである。知覚的先行性は空間的先行性に所属し、その意味では心的領域内の空間的先行性と領域のレベルを異にするとはいえ、関連性はあるように思われる。

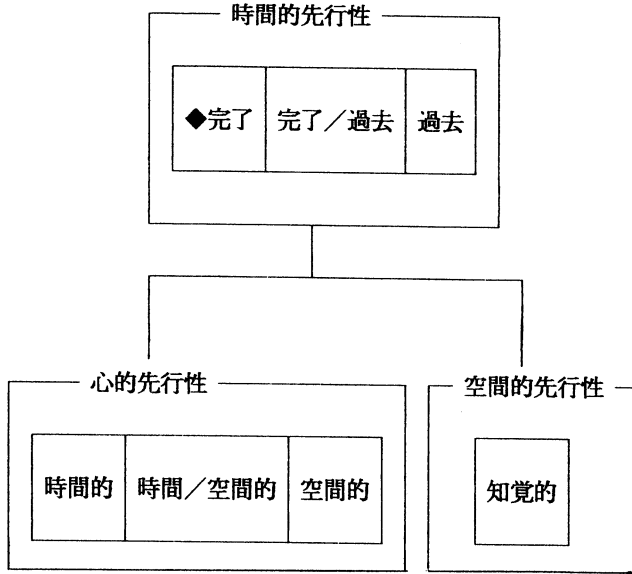
4. 結 論

これまでの考察を通して、〈- san⁴〉には実に多様な用法のあることを見てきた。多様な用法の数だけ多様な意味を認め、項目をいくつか設けて記述するのも1つの方法である。この方法によれば、〈- san⁴〉は多義の意味を備えた形式であると規定でき、形式と意味との1対多の関係を肯定する結果となる。

けれども、〈- san⁴〉の個々のデータを検討する中で、多義とみなされてきた意味は、実際には、1本の糸でつながるという事実が明らかになった。時間的先行性、心的先行性、知覚的先行性の各意味表示は、現実世界か心的領域か、時間的座標か空間的座標かという具合に、直接関与する領域は違っているが、[事態の先行性]というたった1つの意味により、互に関連づけられたものと

なるのである。言い換えるなら、[先行性の表示]を媒介にして、複数の意味を1つのネットワークへと統合することができるのである。

(63) <-san⁴> の意味のネットワーク



<-san⁴> のプロトタイプの意味は[完了表示]である。[完了表示]は、ネットワークの核となる。[完了表示]を支える特徴が欠落すると、[過去表示]が派生する。但し、[完了表示]と[過去表示]との間に明確な境界線が引かれるわけではなく、段階的漸次的な移行過程の様相を呈するのである。

[完了表示]と[過去表示]とは時間的先行性を共有するものとして有縁化される。

心的先行性は、時間的先行性と違って、話者の主観的な領域を主な舞台とする。その非・現実世界における時間的先行性は、理実世界の客観的な時間軸に沿った先行性と質的に異なっている。しかし、心的領域内で作り上げられた主観的な時間軸には従うという点で、現実世界の時間的先行性との間に、なお、並行性を保持していると考えられるだろう。

心的領域内の〔時間的先行性表示〕と〔空間的先行性表示〕の間でも明確な色分けがなされているわけではない。第3．3節で見たように、段階的漸次的な過程をとるのである。

〔知覚的先行性表示〕は、空間的先行性の1つとみなすことができる。この表示は、再び、現実世界を実現の場とするが、心的領域内での〔空間的先行表示〕とパラレルな関係にあることがわかる。前者は客観的な空間を占有し、後者は主観的な空間を占有するが、両者とも空間内に事態を位置関係の観点からのみ位置づけるのである。

〈- san⁴〉という1つの形式は複数の意味に対応するのではなくて、1つの意味のネットワークに対応する。このネットワーク自体は、〔先行性〕という有縁化の基になる意味を介して結び合わされ、互いに関連し合う意味組織体を構成するのである。

Lakoff and Johnson (1980)、Lakoff (1987)、Langacker (1987,1991)、Heine (1992)等でしだいに受肉しつつある認知言語学 (cognitive linguistics) もしくは認知文法 (cognitive grammar) は、言語を自律性の縄目から解放して、もう一度、人間の認知活動の手に戻す役割を演じている。「言語学は科学である。」との客観主義を装ったテーゼは捨て去るべき時期に来ているのである。言語は、形式の面でも、人間の認知の仕方という主観的な営みを既存の言語体系の制約中で、最大限に反映させていると思われる。Haiman (1985)らの提言した言語の「類像性 (iconicity)」は、けして特殊な事柄ではなく、ごく普通にどの自然言語でも観察される事実なのである。

〈- san⁴〉の意味は、認知言語学の提起した代表的な観念、「プロトタイプ論」や「意味の放射状のネットワーク (radial network)」の妥当性を見事に証明している。とはいえ、理論的な枠組みの正当性を訴えるのが本稿の目的ではない。〈- san⁴〉の多様と見える意味に取り組んでいった結果、たまたま、認知言語学と交差する地点にでくわしただけのことである。

今後、形式と意味との対応関係を、接尾辞のような小さな形式にとどまらず、語、句、文のようにより大きな形式に広げて数多く研究していくことで、完了

形接尾辞と類似の対応関係が発見されたなら、それだけ認知言語学の理論の面にも貢献できるであろう。〈- san⁴〉の意味論は、大きな広間に入るためのささやかな入口の1つにすぎないのである。

【略 語 表】

引	：引用形	再	：再帰所有形	2 所	：2 人称所有形
受	：受け身形	3 所	：3 人称所有形	2 命	：2 人称命令形
過	：過去形	使	：使役形	否	：否定形
勧	：勧告形	指	：指定辞	分	：分離副動詞形
願	：願望形	時	：時点副動詞形	未完	：未完了形
完	：完了形	習	：習慣形	連	：連結副動詞形
疑	：疑問形	主	：主格形		
強助	：強意助詞	主題	：主題辞		
共	：共同格形	条	：条件副動詞形		
具	：具格形	相	：相互形		
グ	：グループ形	属	：属格形		
継	：継続副動詞形	対	：対格形		
現	：現在形	奪	：奪格形		

【注】

- 1) 〈- san⁴〉は母音調和の原則に従って〈- san, - sen, - son, - sön〉の4つの交替形をもつ。尚、接尾辞の右肩に付いている数字は、母音調和による交替形の数を表す。
- 2) 〈- xad⁴〉は、非過去形〈- x〉＋繋ぎの母音＋与位格形〈- d〉に分析することができるが、1つの形式として時の副詞節を導くので、「時点」の副動詞形として扱うことにする。
- 3) 本稿の「動名詞形」に当たる。

【参 照 文 献】

- Binnick, Robert I. 1979. *Modern Mongolian : A Transformational Syntax*.
University of Toronto Press : Toronto.
- _____. 1991. *Time and the Verb : A Guide to Tense & Aspect*. Oxford
University Press ; New York / Oxford.

- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge University Press ; Cambridge.
- _____. 1985. *Tense*. Cambridge University Press ; Cambridge.
- Dahl, Östen. 1985. *Tense and Aspect Systems*. Basil Blackwell : Oxford / New York.
- Haiman, John. 1985. *Natural Syntax : Iconicity and Erosion*. Cambridge University Press ; Cambridge.
- _____. (ed) 1985. *Iconicity in Syntax*. John Benjamins Publishing Company ; Amsterdam / Philadelphia.
- Hangin, Gombojab (ed.) 1986. *A Modern Mongolian-English Dictionary*. Indiana University Research Institute for Inner Asian Studies ; Bloomington.
- 服部四郎. 1987. 「蒙古とその言語」 『服部四郎論文集 2 アルタイ諸言語の研究Ⅱ』 98-106. 三省堂；東京.
- 橋本邦彦. 1992. 「複数性の意味論—『弱い言語相対説』に向けて」 『文化言語学—その提言と建設』 978-992. 三省堂；東京.
- Heine, Bernd. 1992. “Grammaticalization Chains,” *Studies in Language* 16, 335-368.
- 栗林 均. 1992. 「モンゴル語」 『言語学大辞典 第4巻下—2』 501-517. 三省堂；東京.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things : What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press ; Chicago / London.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press ; Chicago / London.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 1 . Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press ; Stanford.
- _____. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 2 . Descriptive Application*. Stanford University Press ; Stanford.
- Luvsanjav, Choy, et al. 1976. *Mongol Xel Surax Bichig*. Ulan Bator.
- 小沢重男. 1978. 『モンゴル語の話』 大学書林；東京.
- _____. 1986. 『増補モンゴル語四週間』 大学書林；東京.
- _____. 編著. 1983. 『現代モンゴル語辞典』 大学書林；東京.
- Poppe, Nikolaus. 1951. *Khalkha-Mongolische Grammatik*. Franz Steiner Verlag GMBH ; Wiesbaden.
- _____. 1970. *Mongolian Language Handbook*. Center For Applied Linguistics ; Washington D. C.

- Reichenbach, Hans. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. Macmillan ; London,
- Sanzheyev, G. D. 1973. *The Modern Mongolian Language*. 《NAUKA》
Publishing House ; Moscow.
- Smith, Carlota S. 1991. *The Parameter of Aspect*. Kluwer Academic Publishers ;
Dordrecht.
- Street, John C. 1962. *Khalkha Structure*. Indiana University ;
Bloomington.
- Vietze, Hans-Peter. 1978. *Lehrbuch der Mongolischen Sprache*. VEB
Verlag Enzyklopädie : Leipzig.